津田季穂展

献身と返礼の画家

津田季穂展

1971・7月19日—27日

大阪日動画廊

日動画廊
galerie nichido

あいさつ

津田季穂さんはことし72歳，ローマに本部を持つオブレート会の修道士さんです。山口化成株式会社の社長・山口満雄さんから「立派な絵を描く老修道士さんがいる」と伺って，徳島に津田さんをお訪ねしたのは昨年のことでした。まっ白な頭髪，右眼を掩った黒眼鏡，しかも隻脚で，杖をついておられましたが，堂々たる体丈夫で，何か戦国の武将を思わせる凛とした風格を備えた方だという第一印象でした。その気品の中に，左眼だけが柔かな光をたたえて深く澄んでいたのを忘れることができません。早速作品を見せていただきましたが，これがまたなんのてらいもなく自然で，画面の底の方から美しい色彩が止めどもなくわきあがってくるような不思議な魅力に満ちており，思わず襟を正す思いでした。このような立派な作品を描く作家が，人に知られず隠れておられたことを驚くとともに，これこそ美術愛好家の皆様にご紹介せねばならぬと，個展開催をお願いしましたところ，快く引受けて下さって，こんどの展覧会となった次第です。

津田季穂さんは明治32年，日光で医師の五男として生れました。洋画を学ばれたのは17歳のとき，家の書生に猟銃で射たれ，右眼を失明されてからのことです。中村不折，関根正二らがいた太平洋画会に学び19歳で院展入選後，石井鶴三，村山槐多，安田龍門らのいた日本美術院洋画部に所属して，将来を期待されたのでしたが，洋画部解散，春陽会創立をめぐる人間関係のもつれの醜さにあいそをつかし，以後画壇から離脱してしまいます。その後は村山槐多，今関啓司，坂口右左視，小柳正らと交友をつづけながら，ただひと筋に絵の本質を追及する放浪のスケッチ旅行に出てしまうのです。八丈，小笠原，大島をはじめ，排日運動の盛んな上海に単身出かけていったり，漁師を志して和歌山県田辺に住んだりもしました。

ドイツの哲学者ケーベル博士に傾倒したのは30歳のころでした。描いては考え，考えては描くこの修行の中で，津田さんは幾人かの心の友にめぐり合います。作家稲垣足穂氏もその一人で，その小説『弥勒』の中に絵かきの津田さんが登場していますし，津田さんもまた稲垣さんの作品『山風蠱』を装釘したりするのです。放浪の旅で得た豊富な体験と哲学的な真理追究の結果は，やがて津田さんを神の道へと近づけてゆきます。44歳で洗礼を受けた津田さんは，終戦の年，骨膜炎の右足を切断し，片足となりますが屈せず，戦後の混乱の中で神の愛を説きつづけるのです。隻眼隻脚のこの修道士に救われた多くの人々は津田さんを師と尊敬し，“ポーロ2世”と呼んで慕った程です。津田さんはその布教の間にも，絵を描くことを忘れませんでした。鳴門の画家グループ“ベニウズ”に参加して毎年のように作品を発表しつづけていたのです。昭和43年，徳島県阿南教会に赴任してきた津田さんのために，ベニウズ美術サークルは『津田季穂画集』を出版しました。その画集には，昭和8年から35年間にわたる津田さんの作品53点が収録されていますが「なんのために力まなければならないのか，人が相手だからでしょう。相手が神さまなら力む気にはならない筈だ」という津田さんの絵を描くときの心境が書かれていました。

津田さんの絵は，全能の神に捧げるために自らを虚しくして描かれたものです。神が与えた才能のあらん限りを燃焼して，自然と感応し合う作品です。その深さ，その玄妙な色彩，毅然としたその高さ，その豊かさは，こう解釈するより致し方のない輝きに満ちているのです。

こんどの個展には，このほどローマのオブレート会本部に招かれた津田さんがヨーロッパで描いた風景をはじめ，身近かな人物，静物など67点が出品されますが，このような作家と作品をご紹介できますことを，日動画廊は心から誇りとするものです。

なお図録にお言葉を賜りました稲垣足穂，高橋誠郎両先生に深く感謝致します。

日動画廊社長　　長谷川　仁

津田画伯の回想

柳垣足穂（作家）

セザンヌがそうであったように，津田さんはリンゴが大へんお好きなようだ。私は彼が板キレの上に描いた驚嘆すべきリンゴを知っている。そこには「天地創造」が秘められていた。

セザンヌはカンヴァスを余りに永くいじるので，花などは不向きである。それでリンゴを描くようになったのだと聞いている。津田さんが花を描いているのは私は一度も知らない。彼は一女性をモデルに，そのカンヴァスを削り取ったり，再び盛り上げて行って，またもやそっくり削ってしまったりして，ひと月以上を過ごし，なおどれくらい続くのか見当も付かないので，私はおどろいたことがある。こうして彼の重厚な，ゆるぎのないタブローが仕上るのである。

大正2年3月28日の午前，津田少年は所沢まで出向いて，彼のエノグ箱をひらいていた。そうすると，木村，徳田両中尉を載せたブレリオ鳩尾型が霞の中から現われた。青山練兵場を立って帰ってきたのである。高度は大体300米だったろう。この日，朝から空気の動揺が甚だしかった。近付いてきた黄色い羽根の単葉飛行機は，ぐらぐらとゆれて，逆さになり，左のつばさの端が折れたかと思うと両翼はたたまれて，スーッと，しかし，2，3回くるくると廻りながら雑木林に突っ込んだのである。

この年の東京時事新報社発行の『少年』に彼の作文が載っている。私は先年，この少年雑誌のバックナンバーを百冊ほど手に入れたので，その中に見付けたのである。正確に云うと，大正2年5月号で，彼の作文は「夕立」に関したものであった。その頃彼は神吉季穂と名乗っていた。

津田画伯と私がどういう関係にあり，また私が彼について何事を感じたかということは，私の自伝的小説「弥勒」のおしまいの方にくわしく書いてある。この「弥勒」を収録した私の短篇集は，今日では容易に見付け出して貰えるであろう。

いくつかの言葉

高橋睦郎（詩人）

「私は最近，自分がこれ以上でも，これ以下でもなく，これぐらいのことならやれるなという自分の輪みたいなものが見えて来ましたよ」

もう10年以上も前，福岡県粕屋郡古賀町の海の星教会のデッサン教室にかよっていたころ，津田師がある日，ぽつんと言われた言葉である。当時，20歳をいくつも出ていなかった私は，その言葉の持つほんとうの輝きがわかっていたとは言えない。自分の限界を知らない猛突猛進を最高の美徳と考えがちの若い思考力には，この言葉はともすれば絶望の表白とも受けとられかねないからである。しかし，これを言われた時の師の表情の穏やかさと手の中にある石膏デッサンの美しさは，この言葉が絶望の対極から出ていることを，私の冥い魂にもおぼろげに理解させてくれた。10年後のいまの私にその言葉の意味がすっかり理解できるとは言えないが，寡くともその言葉を発した魂が慈悲の中にあり，この慈悲を母としてこそ，はじめて芸術という超自然のめぐし子が生れるのだということはわかっている。私が同じ言葉を発することができるようになるのは，いつのことだろうか。

「肖ないからいいんですよ。いったいモデルにすぐ肖てしまうなんて，卑しいことだとは思いませんか？」

自分の描くデッサンがモデルの石膏像にちっとも肖なくて少々，自棄になっていた時，私を慰められた言葉である。私はようやく気をとりなおして，前より少しでも石膏像の本質に近づこうと木炭をとりなおすのだった。師の言葉の真意は，即席に上べを肖せることに習熟するな，見た目には肖ていなくともそのものの本質に到れるように努力せよということだったであろう。いま，文章を書いていく上でこの言葉に繰返し出会っている自分を感じる時，師は卓れた画家であるとともに，また卓れた教育者でもあったと認識する。じじつ，私がどこかでものを瞠めることを学んだとすれば，それは他のどこでもなく，津田さんのデッサン教室と公教要理の会にお

いてであった。

「ほんとうの宗教とにせの宗教を見わけるただひとつの方法は，その宗教が美しいか美しくないかを見ることです」

ある日の公教要理のさいの質問に対する師の回答である。師の画人格は師の宗教人格に深く裏打ちされている。だから，この場合の美しさとは決して上べの美しさのことではなく，ものの深奥にある本質から発する美しさのことである。そう言われたのちに見る早朝の弥撒の美しさはほとんど古今の名画の美しさを凌駕していた。人はともすれば画家は画家であり，それ以外の何者でもないことが，その画家の純粋性の証左だと思いがちである。じつはこれは偏狭な純粋主義にすぎない。画家を画に駆るもの，それは画家以前の，存在に対する深い愛ではないだろうか。津田師は画家である以前にまず人間である。

「戦争があることは窮極的にはいいことです。それによって人間に本質的な悪の部分が露呈しますから」

私が直接，耳にした言葉ではない。畏友，片瀬博子夫人が聞いて，感に堪えて私に教えてくれた言葉である。世の偽善的な反戦家たちは目を剝くだろうが，師は決して右翼でも，戦争礼賛者でもない。逆に師ほど深く戦争を憎んでいる人もあるまい。これはそういう師の，人間に対する涙ぐましいほどの認識と愛から出た言葉だと，私は理解している。パスカルの「人間が天使となろうとすると，却て獣になる」という言葉で繰返し私たちをさとされたのも，同じ意味であろう。師の画の比類ない深いいろも，おそらく同じ認識から出ているにちがいない。

「最近，セザンヌがだんだん私に肖て来ましたよ」

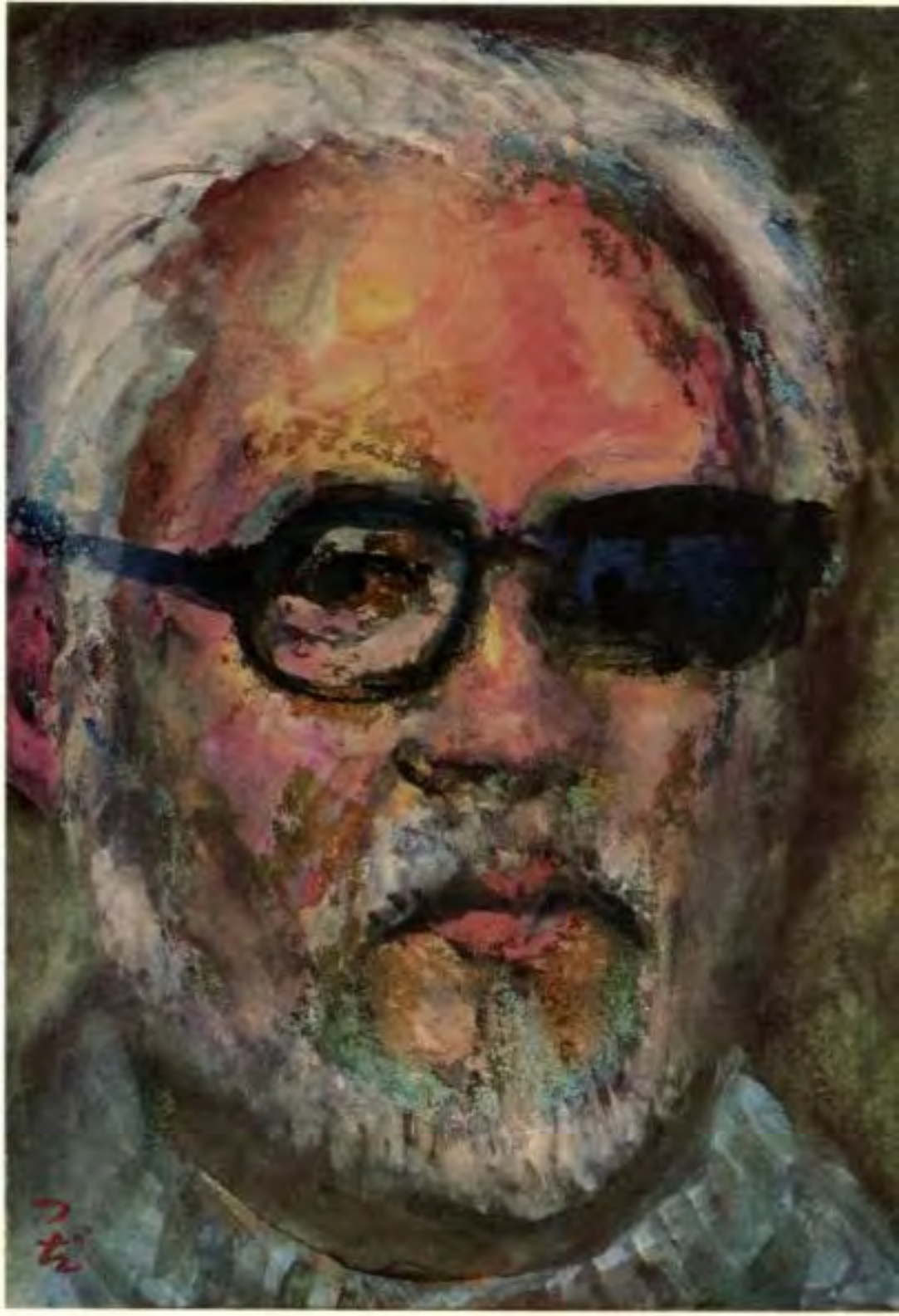
誰かが師のくだものの画を見て「セザンヌみたいですね」と言った時，微笑って答えられた言葉である。この言葉のもつユーモアはともすれば傲慢と誤解されやすい。しかし，この言葉は傲慢ではない。津田師が他の誰でもなく津田師じしんであろうと努力した時，たまたまそのひとつの画がセザンヌに肖て見えた。すなわち，セザンヌが津田師に肖たのである。師はまた，ルオーを，熊谷守一を賞められる。今回の欧羅巴旅行では，特にゴヤとベラスケスに受けた感銘を語られた。これはすべて，「これ以上でも，これ以下でもなく」師が師じしんである静かな，澄明な自信から出たものでなくて何だろうか。

師はいつの日か，「創造主がこのごろ私に肖て来ましたよ」と言われるかも知れない。創造主はこれを傲慢と怒られるだろうか。ただ微笑って，深く頷かれるにちがいない。

1971. 5. 12　紐育の仮宿にて

5 花 10M

7 96 8F



27　自画像　4F

山(阿南市遠岡)　4F

30　田植えの終る頃（阿南室岡町）　4 F

44 鳴門周辺の海 4P

46 地中海 4P

48 婦人像 4M

60 銀のバラ 35

図 絵を描く少女 2F

2　少女像　15M

1　男　15P

3 けしとりんご 12F

8 花 8F

9 秋草 8F

6 池 10M

12 赤いばら 8M

4 椿木ばちの花 10F

10　夫婦岩（鳴門岡崎海岸）　6 P

24　梅雨時の阿南海岸　5 F

10　少女　8 P

13　下北　8 M

21 柿・栗・みかん 6P

20 夏みかん 6P

15 少女 6P

11 婦人像 8P

16 高校三年生 8P

22 レース編みする少女 6F

17 花 6M

18 サボテンとスモモとびわ 6P

23 風景　5F

33 トレドへの道　4F

25 鳴門(冬) 5F

29 河南の海(夏) 4F

少女像 4F

38　ローマ聖ペトロ聖堂を望む　4F

26　レース編みする少女　5M

自画像　4F

たそがれのナポリ湾　4F

40　トレドの城門　4F

33　かもめ群れ荒ぶる北海の海　4F

37 サイロ(北海道) 4F

41 花 4F

39　ロンドンのホテルの窓から　4F

43　風景　4F

34　ローマ（ホテルの窓から）　4F

47　自画像　4P

55　セーヌ河畔の古本屋　3F

56　自画像　3F

51 パリのオペラ座通り 3F

49 阿蘇の海 3F

42 婦人像 4F

57 レマン湖(シュネーブ) 3F

58 河南の海 3S

54 シュキーブ国際赤十字本部 3F

61 絵を描く少女 3S

62　自画像　35

52　海辺のかもめ　3F

45 少女 4P

53 スコッチテリア 3F

65 少女 0S

67 あけび

66 冬南の海 0S

64 婦人像 1M

出品目録

1	男	63.0×48.0	15P
2	少女像	65.0×45.7	15M
3	けしとりんご	60.5×50.3	12F
4	鉢木ばちの花	45.5×53.0	10F
5	花	54.0×35.0	10M
6	海	33.2×53.0	10M
7	少女	46.0×37.5	8F
8	桜草	45.3×38.0	8F
9	花	45.5×38.0	8F
10	少女	45.5×32.5	8P
11	婦人像	45.3×33.4	8P
12	赤いばら	45.5×27.4	8M
13	T氏	45.4×27.4	8M
14	菊	40.7×33.4	6F
15	少女	41.0×29.0	6P
16	高校三年生	41.3×29.2	6P
17	花	41.3×24.5	6M
18	夫婦岩(鳴門岡崎海岸)	28.2×40.5	6P
19	サボテンとスモモとびわ	39.0×29.0	6P
20	夏みかん	27.5×39.3	6P
21	柿・栗・みかん	27.3×42.0	6P
22	レース編みする少女	40.8×33.5	6F
23	風景	35.7×27.0	5F
24	梅雨時の阿南海岸	29.8×36.0	5F
25	鳴門(池)	36.8×26.2	5F
26	レース編みする少女	36.0×20.2	5M
27	自画像	31.0×22.0	4F
28	山(阿南市高岡)	24.5×33.5	4F
29	阿南の海(夏)	24.3×33.5	4F
30	田植えの終る頃(阿南富岡町)	24.4×33.5	4F
31	自画像	33.8×24.3	4F
32	少女像	33.4×24.5	4F
33	かもめ群れ飛ぶ北海の海	24.2×33.3	4F
34	ローマ(ホテルの窓から)	33.3×24.3	4F
35	トレドへの道	24.4×33.4	4F
36	たそがれのナポリ湾	24.3×33.4	4F
37	サイロ(北海道)	33.5×24.3	4F
38	ローマ聖ペトロ聖堂を望む	24.3×33.5	4F
39	ロンドンのホテルの窓から	24.4×33.5	4F
40	トレドの城門	24.3×33.5	4F
41	花	33.5×24.5	4F
42	婦人像	33.4×24.3	4F
43	風景	25.0×33.5	4F
44	鳴門岡崎の海	30.4×32.4	4P
45	少女	32.6×21.2	4P
46	地中海	32.2×22.0	4P
47	自画像	31.8×22.2	4P
48	婦人像	33.0×20.5	4M
49	阿南の海	23.6×29.2	3F
50	教会の見える風景(福岡県古賀)(淡彩)	23.8×27.0	3F
51	パリのオペラ座通り	27.2×24.2	3F
52	海辺のかもめ	22.1×27.0	3F
53	スコッチテリア	22.0×27.2	3F
54	ジュネーブ国際赤十字本部	27.5×22.2	3F
55	セーヌ河畔の古本屋	22.2×27.5	3F
56	自画像	27.3×22.0	3F
57	レマン湖(ジュネーブ)	22.0×27.5	3F
58	絵を描くS	29.0×20.6	3S
59	阿南の海	20.8×29.4	3S
60	庭のバラ	25.5×22.7	3S
61	絵を画く少女	29.0×20.4	3S
62	自画像	27.5×24.5	3S
63	絵を画く少女	24.8×19.7	2F
64	婦人像	20.7×10.5	1M
65	少女	14.0×10.5	0S
66	阿南の海	10.8×14.8	0S
67	あけび	27.0×24.0	色紙
68	サーカスの酒口	24.3×33.2	4F
69	青物	24.3×33.5	4F
70	柿とみかん	22.3×27.2	3F
71	青物	21.8×26.3	3F
72	日日草	22.3×27.3	3F
73	桃	22.2×27.3	3F
74	田舎(阿南)	10.3×14.5	0S

津田季穂年譜

高橋睦郎編

1899年　明治32年	11月23日，日光に内務院長，神吉翁次郎，いせの五男として生れる。神吉家は代々森藩に仕える陪家であった。翁次郎は井上通泰と親しく，江見水蔭とは従兄弟に当る。
1901年　明治34年（2歳）	富山に移る。
1905年　明治38年（6歳）	日露戦争勝利に湧く敦賀に移り，小学校入学。
1907年　明治40年（8歳）	東京小日向台町に移る。牛込江戸川小学校に転入。
1912年　明治45年（13歳）	白山京北中学校入学。音羽に移る。
1914年　大正3年（15歳）	11月，従兄の猟銃を書生が持ち出し，右目に向けて「撃つぞ！」と言った。「撃て！」と答えると発射。生命危篤となるが，翌未明，東大病院に運ばれ，奇蹟的に助かる。入院中見舞に来た別の書生から「あなたの天才のために」と金文字で書かれたスケッチブックを贈られる。叔母の津田姓を継ぐ。
1917年　大正6年（18歳）	3月，京北中学校中退。洋画家，高橋芝山のもとに通学，デッサンを習う。半年程で止め谷中初音町の太平洋画会に通う。同会には中村不折，関根正二らがいた。目白に下宿し，以後，下宿を転々とする。
1918年　大正7年（19歳）	通学一年程で太平洋画会を止める。
1919年　大正8年（20歳）	院展に「山村」を出品。入選して美術院に入る。当時石井鶴三，村山槐多，安田龍門などがいた。
1922年　大正11年（23歳）	美術院洋画部解散。春陽会が生れる。この事件に人間関係の醜悪さを見せつけられ，以後，展覧会を離れる。しかし，村山槐多，今関啓司，坂口右左視，小柳正などとは交友関係にあった。この頃，八丈，小笠原，大島などに盛んに写生旅行。
1923年　大正12年（24歳）	関東大震災以後大阪に住む。
1924年　大正13年（25歳）	排日運動盛んな上海に身一つで渡る。当時の上海では日本人がひんぴんと消えたが，シナ人，ロシア人と親しかったため，危難には会わなかった。
1926年　大正15年（27歳）	帰国。漁師になろうと思い立ち，和歌山県田辺に住む。
1929年　昭和4年（30歳）	この頃，ケーベル博士に傾倒して，世界観の変化。

1933年	昭和8年(34歳)	12月，「父の肖像」を描く。
1935年	昭和10年(36歳)	みかん山を栽培しようと思い立ち，兵庫県に住む。植えつけて去り名古屋に行く。
1936年	昭和11年(37歳)	2・26事件のあと帰京。長崎町のアトリエ村に住む。
1937年	昭和12年(38歳)	この頃和歌山田辺で「呻」「紀州の春」などを描く。
1939年	昭和14年(40歳)	牛込横寺町に移る。種垣足穂と知る。児玉花外の還暦祝いに肖像画を描く。丸山薫，石川淳，辻潤，安巻省三らと会う。
1940年	昭和15年(41歳)	水守亀之助の主宰する雑誌『野火』に特集される。 種垣足穂の『山風蟲』を装幀。
1943年	昭和18年(44歳)	7月18日，関口教会沢出神父の司式で洗礼を受ける。洗礼名ヨゼフ。 受洗後，鳴門に行き，大村正郎に住む。
1944年	昭和19年(45歳)	徳島で空襲に会う。一時東京に帰り，再び徳島へ。田中神父（現司教）のもとに投ずる。
1945年	昭和20年(46歳)	結核性骨膜炎に罹り，右足切断。東京葛川郡で終戦の詔勅を聴く。 赤穂，土佐，東京，鳴門などを行き来する。
1946年	昭和22年(47歳)	赤穂で「水守亀之助像」を描く。 12月，鳴門の画家のあいだに"ベニウズ"生れる。
1947年	昭和22年(48歳)	鳴門大村邸の二階に住む。
1948年	昭和23年(49歳)	3月，ベニウズに参加。「りんご」「鳴門」などを出品，以後毎年出品する。この頃特に布教の成果は目ざましく，受洗者の中から司祭，修道女が輩出。ボーロ2世とニックネームを付けられる。
1952年	昭和27年(53歳)	12月8日，安芸オブレート会修練院で着衣式。布教と観想の生活。
1959年	昭和34年(60歳)	12月8日，安芸，海の星教会で修道終生誓願。
1960年	昭和35年(61歳)	1月，福岡県古賀教会に赴任。病院を主とする布教活動に従う。
1967年	昭和42年(68歳)	11月，福岡市フォルム画廊で個展。
1968年	昭和43年(69歳)	9月，徳島県阿南教会に転任。 11月，画集出版。

＊おことわり：会期中、会場の都合により陳列作品の一部を変更することがあります。

発行＝長谷川　仁
日動画廊　GALERIE NICHIDO　©1971
東京都中央区銀座7丁目4番12号　電話(571)2050(代表)
製作＝日動出版

日動画廊
galerie nichido

日動画廊　東京都中央区銀座７の４の12☎03(571)2553(代表)
東急日動画廊　東京都渋谷区渋谷２の21の12(東急文化会館６階)☎03(407)4541
数寄屋橋日動サロン　東京都中央区銀座５の３の16☎03(571)7381
名古屋日動画廊　名古屋市中区錦２の９の25☎052(211)1878
大阪日動画廊　大阪市東区北浜３の４１☎06(231)8739(代表)